

## <紙面直言>

### 首都圏に問題意識を一神奈川から見る視点大切

朝起きたらまず神奈川新聞を読むという習慣が、県庁生活16年間にすっかり身につけてしまった。この習慣は県庁を辞めてからも続いている。ただ、新聞の読み方は大きく変わった。県庁時代には県政が紙面でどう扱われているかが最大の関心事で、記事を読んでは一喜一憂したものだが、今は県政記事も心にゆとりをもって読むことができる。もちろん、県政に関心がなくなったわけではなく、関心が相対化され、他の分野の記事により多く目を通すようになったということである。いわば県庁メガメを外したわけで、新聞の読み方としてはこの方がノーマルであろう。

さて、そうしたノーマルな読み方を始めて半年が過ぎ、新しい感想もわいてきているが、せっかくの機会を与えられたので、県庁時代に心に感じながらも取材対象という立場上発言しにくかったことも含めて、いくつかの提言を試みたい。

まず、紙面づくりの基本姿勢の1つとして「神奈川にとって東京・首都圏とは何か」という問題意識をもっと明確に持っていてほしいということである。本紙の使命として、地元の問題をフォローするのは当然であるが、神奈川問題の多くが実は東京問題や首都圏問題の一部であることを考えると、神奈川問題をフォローするためにも神奈川の立場から東京や首都圏をどうとらえ、どう位置づけるかという視点が大切である。

私はかねがね不思議に思っているのだが、「首都圏サミット」に参加している東京、神奈川、千葉、埼玉の1都3県だけで全国の4分の1を占める3,200万の人口を擁し、世界最大のメガロポリスを形成しており、それだけに都市問題や環境問題など世界に類例のない課題を抱えているにもかかわらず、この地域の問題を責任と権限を持って系統的にフォローする組織がどこにもないということである。日本で最も活力に富む豊かな地域と見られながら、市民生活面での「豊かさ指数」では、常に全国最低にランクされている(国民生活白書)のも、このことと無縁ではないであろう。この意味で、首都圏サミットはまだ実績に乏しいとはいえ、首都圏問題をテーマとする自治体連合の萌芽としての意義は大きい。

とくに本県は東京に隣接するメリットとデメリットの矛盾の激しいところである。政令市で昼夜間人口差が一割もあるのは横浜と川崎だけである。さらに最近では第4山の手が藤沢あたりにまで及んでいるとも言われている。神奈川が東京にのみ込まれないで、その自主性、自立性を豊かにしていくには、東京との棲(す)み分けをあらゆる面で意識的に追求していく必要がある。

神奈川県は東京との棲み分けについて、主に産業政策面で努力を重ね、一定の成果を上げてきているが、本紙もまた神奈川の立場からの対東京・首都圏政策の確立に向けて、ジャーナリズムとしての責任を果たしてほしい。

## <紙面直言>

### “グローバル”な紙面を一「世界」と「地方」をどう結合

ユーラシア大陸に激動が続いている。ウクライナの独立に端を発するソ連邦の崩壊と独立国家共同体の創設、ゴルビーの退陣、EC連合を目指す西欧の壮大な実験、南北朝鮮の劇的な和解—歴史のダイナミズムに息をのむ思いだ。

スラブ3国の動きにはクーデター的な面もあり、今後の問題を残しているが、それはさておき、私がウクライナの動きに特に関心をもつのは、かつてソ連の自治体と交流したいとの長洲知事の意を受けて訪ソし、各地を回った結果、ウクライナのオデッサ州を適当な相手として進言した経過があるからだ。しかしウクライナはもはやソ連ではないし、隣国でもなくなった。神奈川との関係はどうなるのか。そもそも日本との関係はどうなるのか。

そんなことを考えていたとき、日ソ関係に尽くした老外交官の叙勲祝賀会に招かれた。旧ソ連大使館から公使以下数人が出席しており、みな旧知の人だったので率直に見解を聞いてみた。「ウクライナは重要な国になる。神奈川県とオデッサ州の関係は大切だ。ぜひ友好関係を続けてほしい」「ウクライナは隣国と多くの領土問題を抱えており、完全独立は難しい。強行すれば戦争になる。ロシアとの協調がカギだ。地理的にみて西欧志向が強くなるだろう」。ニュアンスの違いが気になるが、近く帰国してウクライナ政府とも協議してくるといふBさんと再会を約して別れた。

KSPという小さな窓口にも激動する世界の鼓動が聞こえてくる。しかも地方同士の交流がますます重要になっていることを感じる。最近も米ソ中韓台豪から来客が相次いだ。懇談を通じて地域間の経済交流が予想以上に広がっていることが分かった。とくに中韓の交流が活発だ。環黄海経済圏はすでに動き出している。11月に韓国・京畿道で聞かれた東アジア経済サミットに参加できなかった中国・遼寧省は、大変残念がっていた。

本紙はこれまでも国際関係や民際外交に敏感で、よくフォローしているが、現実の動きが急ピッチなので、なかなか追い切れないのが実情である。とくに地方レベルの動きは全国紙でもキャッチできていない。その意味で、本紙の今後の大きな使命の一つは、グローバリズムとローカリズムをどう結びつけるか、ということではないか。最近“グローカリズム”という合成語が使われているが、これからの新しい世界秩序を考える上でグローバリズムとローカリズムはともに不可欠のキーワードになっていく。しかも、この二つのキーワードを結びつける重要な接点に、この神奈川は位置しているのではないか。

神奈川新聞は、まさにこの神奈川において“グローバル”な新聞になり、ジャーナリズムにおけるグローカリズムの旗手になってほしいのである。そのためにも日本と世界におけるローカルな動きを、たえずグローバルな視野からフォローアップできるアンテナの整備と、感度の向上をはかっていくべきであろう。

## <紙面直言>

### 尾引く甘い歴史認識—権力と報道の関係に教訓

ソ連・東欧革命が如実に示したように、世論とマス・メディアが結びついたとき、鉄壁を誇る絶対権力をも打ち砕く巨大な力となる。日本でも田中元首相はじめ何人もの権力者がマスコミと世論の力で倒されてきた。ロッキード、リクルート両事件はもとより、今回の共和リゾート汚職摘発でもマスコミの果たした役割は大きい。

現代社会では、政治的民主主義は自由なマスコミの存在によって保障されている。マスコミの発達なくして今日のような民主主義の発展もなかった。同時に、権力者にとってマスコミは政治的演出や政策宣伝のための強大な武器ともなる。マスコミの巧みな利用によって権力基盤をより強固にすることもできる。

したがって、権力はマスコミを恐れる一方、これを操作したい誘惑にかられる。マスコミにとっても権力は最大の情報源の一つであり、できれば権力の中枢に肉薄し密着したい衝動にかられる。こうして権力とメディアは別々の思惑から互いに接近し密着する。

密着と癒着の間の質的距離は大きい、量的な距離はない。イトマン事件で多額の金品を受け取ったとされる新聞記者や雑誌記者は、誘惑にまけて聖なる壁を越えてしまった。リクルートや証券不祥事の際にも、マスコミ関係者の名前があがった。信じたくないことだが「マスコミ汚染」も結構根が深いと見られている（本紙1月19日）。これは権力をチェックすべきマスコミが、一つの権力になってしまっているからではないか。

いま米国のジャーナリズムに無力感が広がっているという。湾岸戦争の報道で軍の情報操作をつき崩せなかった反省からである。そして戦争終結1周年を迎えるいま、戦争の隠された部分が少しずつ明るみに出され、あの戦争への懐疑的議論が起こり始めている。ブッシュ大統領を90%の国民が支持したあの熱狂はどこへ行ってしまったのか。そもそもあの熱狂は何だったのか。改めて権力と報道の関係に重い教訓を残した。

日本にも同じようなことがある。昨年末、真珠湾攻撃50周年に合わせて戦争と報道をめぐる回顧記事があったが、マスコミの反省の甘さが今も尾を引いているように思える。

最近、日本人の歴史認識がいろいろな形で問われており、マスコミも韓国・朝鮮人、中国人の強制連行や従軍慰安婦の問題を大きくとりあげ始めた。しかし余りにも遅いのではないか。中国残留孤児問題でもそれを思った。あと10年、20年早かったらどんなに多くの人が救われたことか。

マスコミの追う「いま」は刹那(せつな)的な今になりがちだが、求められているのは歴史のなかの「いま」なのだ。近隣諸国への戦争責任をあいまいにしてきたことが、21世紀へ向かう日本の足かせになっている。政治とマスコミの責任は大きい。同時に、それは私たち自身の重い課題でもある。結局、私たちは自らにふさわしい政治しか持てないと同じように、自らにふさわしいマスコミか持てないのだから。

## <紙面直言>

### 社会の質表す老人問題—人間化目指す紙面作りを

少し古くなるが、本紙が昨年12月連載した「家を追われて」は、都心を追われる老人の住宅問題という重いテーマに迫った好企画だった。現状報告と問題提起にとどまらず解決策を探った点が印象に残った。たまたま最近、老人（いい言葉ではないが取りあえず使う）が心ない扱いを受けている風景をたて続けに見て重い気持ちになっていたのでも深く心にしみた。銀行のカウンターで通帳や書類を広げ、何かを訴えているのだが、納得しないまま対応を打ち切られ「年寄りだと思って・・・」と口惜しそうにつぶやきながら待合のいすにへたりこんだ老人。つえをついて無料パスでバスに乗ろうとしたが、運転手に「ちゃんと見せろよ」と一喝されてすっかりうろたえ、バスを降りてしまった老人。駅の階段でかけ降りてくる学生たちにはじかれて転んだ老女・・・。

もちろん、老人が心のこもった扱いを受けている場面にたびたび出会っていることも言うておかねば公平を欠くだろう。だが先日大衆食堂で隣り合わせた老人が「長生きしてもいいことないですよ。どこへ行っても厄介者ですからね。こないだはある店で『年寄りに用はないよ』と言われました。街へ出るのがだんだんいやになりました」と寂しげに話していた言葉に、いま老人がおかれていた立場が象徴されているように思えた。

連載記事を読み、街頭風景を観察しながら、私は昔読んだボーボワールの「古い」の一節を思い浮かべた。「人間がその最後の10年ないし20年のあいだ、もはや1個の廃品でしかないという事実は、われわれの文明の挫折をはっきり示している」

彼女はこの本で、老人が社会からどう扱われているかによってその社会の質が決まると言っているが、彼女に従えば世界一豊かな国といわれる日本で「文明の挫折」が始まっていると言わざるを得ない。「個室への願望」（2月17日、沖藤典子）は、北欧福祉社会と日本との落差を鮮やかに示してくれた。

このことを人権という観点で見れば女性、障害者、同和、外国籍住民にも共通する問題である。途上国からの留学生や外国人労働者が借間探しに四苦八苦している話はよく聞くが、先日KSP国際フォーラムに出席した米国人学者から「外国人はお断り」と言われたすし屋の話聞いた。日本でも「外国人嫌い」が始まったのだろうか。異質なものが共存している社会こそ正常なのだという、北欧が生んだノーマライゼーションの考え方を私たちがどこまで自分のものにできるかに、日本社会の質の問題がかかっている。

生活の質の向上とか、生活大国という言葉が乱舞し始めているが、それを目指すのであれば何よりも社会の質を人間的ぬくもりのあるものに変えていくこと、人権先進国になることが前提であろう。

本紙が文明開化発祥の地で「文明の挫折」を拒み、社会の人間化のための紙面づくりに励まれるよう期待する。

## <紙面直言>

### クオリティー紙目指せー「特定多数」の読者を念頭に

これまで4回、紙面づくりへの提言を試みてきたが、本紙の経営面を考えると胸が痛い。本県は首都圏のど真ん中にありながら、いや、それ故に東京を本拠とする全国メディアの圧倒的影響下に置かれ、ローカルメディアが育ちにくい環境にあるからである。スウェーデン並みの人口、韓国並みの経済力、さらには日刊新聞発祥の地という伝統まで持ちながら、県内唯一の本格的な地方紙である本紙の県内シェアは、全国紙のそれに比べ格段に小さい。経営面で重いハンディを背負わされている。

全国的にみれば、いま地方紙がとても元気だ。全国紙に先がけてロシアの極東地区に支局を開いたり、NIES、ECに拠点をつくって東京経由でない地域の国際化に取り組む地方紙が増えてきた。興味深いのは東京からの距離が大きいほど、地方紙が元気なことだ。もちろん「神奈川新聞の場合、部数はあまり問題ではない。県内各地域に根を下ろしているオピニオンリーダーに広く読まれているから部数以上の影響力がある」という意見がある。私もこの意見に近い。部数の点で全国紙の追随を許さない有力地方紙のようになるのは、マスコミの本拠・東京に隣接している以上かなり難しい。

私の経験から言っても、昭和50年に県庁に勤めるまでは、本紙を読んだことがなかった。東京に通勤し、東京志向の生活をしている限り、とくに不便は感じなかった。ところが県政にかかわり出した途端、本紙は不可欠の情報源になった。

このことは、本紙の読者は漠然たる不特定多数ではなく、神奈川という地域社会に深くかかわって生き、働き、思考する人々—広い意味での特定多数者だということを示している。だとすれば、こうした特定多数の人々のニーズにどうこたえるかに、紙面づくりの目標をしぼるべきであろう。その一つの方向はローカルなクオリティー紙になることである。もちろん全ページをそうする必要はないが、数ページ使って県内事情を中心に質の高い情報、分析、評論、オピニオンなどを載せてはどうだろうか。

近県に住むある知人は本紙の愛読者であるが、彼によれば「神奈川の動きには全国の動きを先取りするものが多い。神奈川を見ていると時代の流れが分かる」という。過分な批評とは思いますが、ここに本紙の大切な特色があり、めざすべき方向も示唆されている。

いま神奈川は歴史的な構造変化のただ中にある。日本の工業基地であった京浜工業地帯が日本最大の高度技術複合地域ないし研究開発地域に変ぼうしているのをはじめ、本県は全国に先がけて21世紀への扉をたたき始めている。明治以来の本県のパイオニア機能、苗床機能は新しい次元で重要性を増している。こうした動きを光と影の両面から克明にフォローすることが、クオリティー紙への道につながるはずだ。4月からの紙面刷新に期待する。カナシンよ、頑張れ！